1986

昭和61年

5月10日　マイセンの鐘落成式
　　県立九州陶磁文化館
　　鍋島直紹先生顕彰碑除幕式
　　マイセンの森
11月23日　マイセン市へさくら200本送る

マイセンの鐘落成式

有田にある「マイセンの森」の鍋島先生顕彰碑

「鍋島直紹先生顕彰碑」除幕式

マイセン市長と園児たち（九州陶磁文化館）

マイセン市長県立有田窯業大学校へ

ハウベンカズア落成式

1987

昭和62年

3月23日　マイセン市長来有
～28日　ベルリン誕生750年祭への招待をいただく
5月30日　ベルリン誕生750年祭町長一
～6月13日　行出席　3人
23日　ＤＤＲから噴水台座届く
　　重さ7.25kg　12ＣＳ
11月1日　噴水磁器像ハウベンカズア落成式　　県立九州陶文化館

1988

昭和63年

1月18日　マイセン市長よりお手紙
　　ベルリン訪問のお礼と6月マイセン市招待

5月23日～6月2日　有田マイセン姉妹都市10周年を記念して窯業視察団マイセン市訪問
　　佐賀県・有田町の代表とツアー参加者
　　町長　マイセン市名誉市民の章を頂く

25日　町長　マイセン市名誉市民の章授章祝賀会
　　大有田焼会館

10月12日～14日　マイセン国立製陶所ラインハルト・フィヒテ総裁一行来有
　　ラインハルト・フィヒテ総裁
　　Mr. マース
　　Mr. ウエルナー
　　橋田GK社長

19日　ＤＤＲ政治経済研究所長
　　マックスシュミット氏来有

12月12日～14日　駐日ＤＤＲ大使館特命全権大使一行来有
　　マンフレット・シュミット大使
　　エリカ・シュミット大使夫人
　　フランク・バイヤー三等書記官

青木町長マイセン市名誉市民の章うける

サンスーシー宮殿前

マイセン市庁舎にて

有田マイセン磁器300年展テープカット（東京）

300年展会場

レセプション

1989

平成元年

3月～6月　姉妹都市提携10周年記念事業
　　『有田・マイセン磁器300年展』の開催

東京　3月1日（水）～3月14日（火）
　　そごう東京店（有楽町そごう5階）
　　※但し物販は、
　　東京会館（丸ノ内）で3月4日限り

大阪　3月24日（金）～3月29日（水）
　　そごう大阪店（心斎橋そごう8階）

広島　4月7日（金）～4月12日（水）
　　広島そごう9階

豊田　4月19日（水）～4月29日（月）
　　豊田そごう8階

横浜　5月17日（水）～6月11日（日）
　　そごう美術館（横浜そごう6階）
　　※但し物販は、
　　5月17日（水）～5月22日（月）まで

札幌　6月14日（水）～6月19日（月）
　　札幌そごう8階

福岡　6月28日（水）～7月3日（月）
　　福岡玉屋

ドイツ民主共和国における

『日本有田の陶芸並びに名窯展』

開 催 地　エアフルト市　美術造形博物館
1985年３月14日～５月14日
マイセン市　アルブレヒト城
1985年６月７日～６月28日
ベルリン市
ケペック宮殿美術工芸博物館
1985年８月８日～９月８日

展示構成

〔陶磁器〕	古陶磁	古伊万里	11点
		柿右衛門	８点
		色鍋島	８点
		古唐津	７点
	現代作品	古伊万里系	５点
		柿右衛門系	５点
		色鍋島系	５点
		唐津系	３点
	現代陶芸作家作品		46点
	伝統工芸士作品		３点
	産業用陶磁器		87点
	工業用磁器（タイル・耐熱酸磁器）		10点
	電気用磁器（碍子）		２点
	ニューセラミックス		３点
	計		203点
〔パネル〕			
	佐賀県の代表的風土		14点
	有田の自然環境、歴史的環境、教育者等人物		54点
	有田焼にかかる住民の生活の紹介		４点
	マイセン市との交流を示すスナップ		７点
	グラフによる町勢の紹介		７点
	計		86点

図　　録　Ｂ５版　119ページ　ドイツ語版
（ドイツ民主共和国側作成）

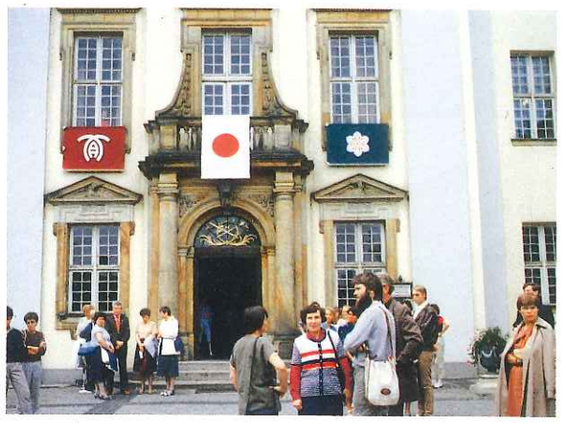
ポスター　Ａ２版　カラー
（ドイツ民主共和国側作成）

マイセン市アルブレヒト城全景

有田焼とパネルの展示

有田焼とマイセンの子供

記念講演をする今右ェ門氏


ベルリン・ケペニック宮殿会場入口

エアフルト市美術造形博物館前

パンフレット　Ｂ５版　20ページ　5000部
ドイツ語版

シンポジウム
〔発言者及び発言内容〕
岩尾新一　有田商工会議所会頭
『有田焼の現状と今後の方向』
13代今泉今右衛門
『重要無形文化財　色鍋島の伝統について』
深川　正　㈱香蘭社社長
『有田色絵磁器とその東西交流』

映　　画
『有田焼の町から』
16ミリ　20分　ドイツ語版　２本
ビデオ　１本
重要無形文化財『色鍋島』
16ミリ　20分　ドイツ語版　２本
重要無形文化財『柿右衛門』
16ミリ　20分　ドイツ語版　２本

姉妹都市マイセン

陶磁器の町—マイセン

マイセンは、ドイツ民主共和国（ＤＤＲ）の南部、エルベ河沿いに位置し、1000年以上の歴史をもつ古い町です。アルブレヒト城とドームの姿は、はるか遠くからも見えます。
とくにさしたる崩壊もなく中世のまま全体の姿をとどめた市の中心部がマイセンの特徴となっています。
マイセン国立製陶所は、文化遺産を守り、目的にかない様式美を伴った新しい作品を生み出している。こうして、マイセン磁器という美しい響きは生き続け、現代的なスタイルが、世界に常に新鮮な印象を与えています。
数おおくの型により、マイセン製陶所は、過去の時代の陶磁器を複製することも行っている。オリジナルに忠実な申し分のないその完成度は、残された多数の文書、あらゆる時代の事実、工場での問題等の記録、又数多くの原画、習作、形成手引書、絵画などに負うものである。
最近の芸術的な新作も、製品のかなりの部分を占めるようになっている。

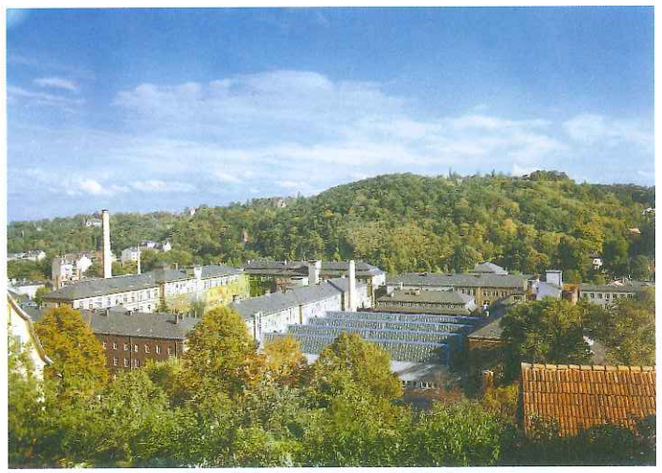
エルベ河とアルブレヒト城

マイセン市中心部

芸術家集団

製陶所内デッサン学校

ケンドラーの作品


マイセン国立製陶所

人材育成と福祉

マイセン国立製陶所は、世界の陶磁器芸術の発展に寄与することを、その使命と考えている。このような高い芸術的要求は、人材、技術的条件がそろって初めて満たされるものである。
現在マイセン製陶所には約1800人が従事し、そのうちの600人余りが絵付け師である。絵付け師のほとんどは、見習いとしての修業をこの製陶所で積んでいる。適した能力をもった専門職の後継者を育成することは最も重要なことであり、現在約200人の見習い工が形成、絵付け、特殊専門形成といった職業をめざして教育を受けている。ＤＤＲ全国から、多くの希望者がこの養成コースに応募してくる。そのためマイセンには、見習工養成工場や、地方からの見習い工のための宿舎がある。
若手の専門職人にもまた、養成コースがある。職業への愛着、またより高い技術をめざしての資格取得のために、花絵付け、インド絵付け、人物装飾、型の形成など専門芸術教育がおこなわれている。
工場内施設の様々な改築により、労働条件の根本的な改善が図られている。製陶所の性格は、新しい技術を導入することにより、さらに守られるようになった。
さらに、マイセン国立製陶所の職員は、クラブハウス、保健室、サウナ、バルト海沿岸、及び林間の保養所、幼稚園、保育所などの様々な福祉施設を利用することができる。

マイセン磁器の特徴

陶磁器技術を守り、発展させていくことにより、マイセン磁器の質の高さが保証されている。工場の所有する鉱山から発掘された白陶土は、1450℃までの高い焼成温度と長い焼成時間により、美しい不変の特性――優れた造形性、釉薬のつややかさ、類のない白さ、さらに、透明感ある、きめ細かい、耐熱性、傷に強いといった物理的な特徴をそなえている。上絵付け、下絵付けの色は、数世紀を経た処方箋をもとに実験室内でのみ作られ、マイセン磁器の美的完成の基礎となっている。特にきわだっているのは、上絵付けにおける豊富な色彩、色の輝きと調和、色調の持続性である。

製陶所付属陶磁器美術館には、毎年30万人余りの見学者が訪れる。美術館には、18世紀から20世紀までのマイセン磁器コレクションが陳列されており、又見学者はここで製陶所で磁器がどのように作られるか、その実演を見学することもできる。

インド絵付け

たまねぎ模様

マイセンのバラ模様

陶磁器美術館を見学する有田の代表団

故鍋島直紹氏記念碑の落成式に参列する有田の代表団

マイセンのフラウェンキルヒェ（教会）

有田との交流

マイセン市民にとって、参議院議員であり、日本ＤＤＲ友好議員連盟会長であった故鍋島直紹氏の功績は、忘れられないものである。その功績を称え、マイセンにある、『有田の森』にマンセンの花崗岩とマイセン磁器で作られた故鍋島氏の記念碑が建てられた。記念碑の落成式は、製陶所275年祭のためＤＤＲを訪れた日本の友好代表団、鍋島夫人、有田町の青木町長の参列を得て、マイセン市長クラウス・ドイマー氏により行われた。

有田にあるマイセンのグロッケンシュピール（平和の鐘）と陶磁器の噴水は、二つの町の友好のしるしであり、同じものがマイセンのフラウエンキルヒェ（教会）とケンドラー公園にも設置されている。

世界的に有名なマイセン製陶所の他に、マイセンには陶磁器産業、機械、金属加工工場がある。

マイセンの景観

ドレスデン県マイセン市は、エルベ河をはさんで24㎢の平地をもつ人口38,000人のまちである。かっての町の中心地は、エルベ河の支流に位置する。
町は、丘と山の背に囲まれているため、勾配が多く平地は少ない。
エルベ河沿いにあり谷間の窪地であるため、マイセンは穏和な気候に恵まれ（年間平均気温9.6℃）、エルベ河東岸では、天候によって収穫の多い少ないはあったものの、ぶどう栽培がすでに1161年からおこなわれていた。
今日では、310ヘクタールの耕地面積があり、ザクセンぶどう栽培協同組合、及び1300人あまりの人々が、余暇にぶどう園でぶどう栽培に従事している。
穀物、果物、野菜の栽培に適した肥沃な耕地により、マイセン地方は収穫の多い農業地帯となっている。
最近では、食料供給をさらによくするため、温床栽培も行われるようになった。
春には、広々としたりんご農園にりんごの花が咲き、秋にはりんごがたわわに実る。有田町民にもおそらく有名なケンドラーの噴水のあるケンドラー公園、かってのフランシスコ修道院の前にある100年の菩提樹とハインリッヒの噴水、製陶所へと続く道にはファシズム犠牲者記念碑のケーテ・コルヴィッツ公園があり観光客やマイセン市民の足を立ち止まらせる。
ぶどう畑、エルベ谷、狭い路地、中世の家並みなどが、マイセン特有の魅力である。

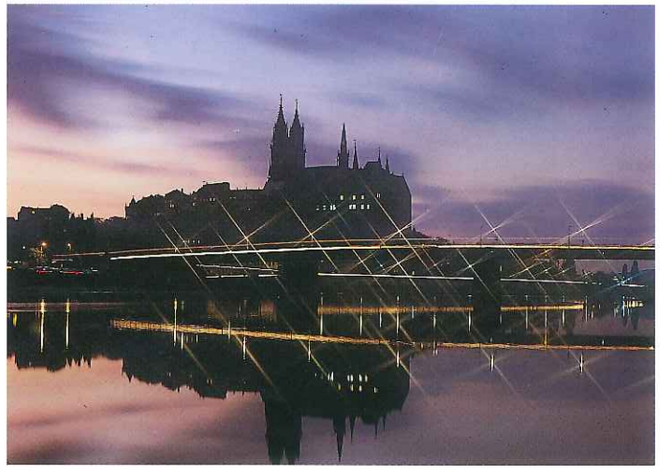
旧市街の眺め

冬景色のぶどう畑　遠くにアルブレヒト城とドームがみえる

マイセンの農園風景

ズイベンアイヒエン城（今日では専門学校の施設となっている）

子供たちの祭り


マイセンの夜景

社会主義工業都市としてのマイセン

1949年のＤＤＲ建国以来、社会施設を充実させるため、マイセンでは多くの建設工事が行われ、今日では、きめこまかい学校、幼稚園、保育所の教育施設網ができている。保育料、教育費は無料であり、両親は昼食代の一部を負担するだけである。マイセンには、また農業生産協同組合の責任者を養成する学校や、機械製作の技術養成大学、文化施設長のための専門学校がある。
施設の充実という体制により、乳児から高齢者にいたるまで、無料の医療が保障されている。
３つの老人ホームと２つの養護院があり、それぞれの希望にあわせて老後をおくることができる。
余暇のスポーツも盛んである。市民は、12の施設を自由に利用できる。
マイセンにある製造工場の共同作業により、1979年、サウナ付のスポーツホール、スイミングプールが建てらた。
競技場、屋外プール、ウエイトリフテング場、スピードウエイ競技場などが、スポーツ活動をさらに活発にしている。
市の門の前にあるズィーベンアイヒェン公園は、市民や観光客でいつもにぎわっている。1985年にできた有田の森も、この公園の魅力となっている。
マイセン市民も又、祭り好きである。ぶどう収穫の時期は、二年毎に収穫祭が催される。
また、毎年５月の最後の日曜日には、マイセン子供祭りが行われる。色鮮やかなパレードが町の中をねりあるき、はめをはずして祝う楽しい一日である。

マイセンの思い出

国交のなかった昭和45年、マイセン市を訪れ、長く閉ざされていた門をたたき、交流の掛け橋をつくった７人の侍は、17世紀における我が有田焼の国際性、経済性の位置づけ調査におもむいて、早満19年の歳月を経た。

思いおこせば、昭和49年に西日本新聞社企画の、ドレスデン所蔵古伊万里の里帰り展のため、作品選びに陶芸評論家の故永竹威氏と故深川正氏、館林源右衛門氏、元西日本新聞常務の久間覚氏、それに私の５人で、再び訪問した。

昭和50年、古伊万里里帰り展が盛会に終了し、そのお礼にＤＤＲを訪問し、体制を乗り越えた、姉妹都市の締結へと進んだ。

ＤＤＲの国家評議会議長が来有され、名誉市民の称号を贈り姉妹都市交流の重要な節目となった。

両国の深いつながりと、姉妹都市交流10年の歳月が両陶都に交際化と文化交流の新風を吹き込み、さらに友好のきずなを深められんことを願います。

1970年８月訪問７人の侍のメンバー
有田町在住　肥前陶磁器商工㈳理事長
蒲　地　昭　三氏

1970年８月訪問

明治、大正、昭和、三世代同居の、有田・マイセン姉妹都市友好訪問の旅だった。姉妹都市マイセン市では、古城の中で、室内弦楽奏に歓迎され、荘厳な気持でセレモニーに臨んだ。

古き良きものへのあこがれが現実となって、この訪問団に参加し後世に残すものづくりの姿勢が、ますます強く確固なものになった次第である。

1979年９月訪問
有田町在住　しん窯
梶　原　茂　弘氏

1979年９月訪問

1979年９月訪問

1979年９月訪問

1979年９月訪問

1982年５月訪問

東西磁器発祥の地である佐賀県の有田町と、ドイツ民主共和国マイセン市とが姉妹都市の縁組をし、1979年９月、有田町の青木類次町長を団長とする37人の親善訪問団がマイセン市を訪れました。

私も金融界の代表として、その一員に加わりましたが、ＤＤＲはもちろん、ドイツそのものに行ったのがその時初めてでして、50年前旧制佐高でドイツ語を学び、ドイツのロマンにふれた青春時代が思い起こされ、私にとっては忘れえぬ旅になりました。

ライン川の船下りでは、やはり旧制高でドイツ語を学んだ香蘭社社長の深川正さん、福島大学教授の下平尾勲さんと３人で、『ローレライ』等を歌い、夕日に生える眼下の景色に酔いました。ところが途中一緒だった仲間とはぐれ、ぶどう園の農家の奥さんに出会い『バス停留所はどこか』と訪ね、又農夫に途中まで案内していただき、やっと仲間と出会う事ができました。

夕日に輝くラインの流れに見惚れたのか、ローレライの岩にたたずむ魔女に魅せられたのか、魔術にかかったような迷い道は、私のドイツロマンの旅を一層哀歓こもごもしたものにしてくれました。

1979年９月訪問
佐賀市在住　佐賀共栄銀行相談役
宮　副　新　一氏

1982年５月の香月知事、井本総務部長と有田の有志一行の、国立マイセン製陶所付属技術者養成学校視察は、佐賀県立有田窯業大学校設立の最終決断を促す程に衝撃的であった。全国から募られた青少年が、実習と専門科目に徹した２年間の教育を経て、見事な卒業製作を残し、あのマイセン焼の絵師として、実務についていっている姿に、明日の有田を模索する一行全員が光明を発見した思いをした。

それにしても、ここに至る道を切り開いたのは、鍋島直紹氏であろう。明治のはじめ留学された祖父君と同じく、ドレスデン工科大学に留学された氏の強い絆がマイセン市との姉妹都市締結を含む交流を生んだ。DDR 側も氏の行績を讃え、同大学の一つの建築にNABESHIMA BAU（鍋島館）という名前がつけられた。私たちは、幸いにも鍋島館の命名式に参列することができ、感激の中で遺徳を偲んだ。

1982年５月訪問
芝浦工業大学教授・アルセッド建築研究所代表
三井所　清　典氏

私がＤＤＲに行ったのは、1985年の３月でした『日本有田の陶芸並びに名窯展』の第１会場であるエアフルト市で、展示の仕事をしました。

写真の中央の建物が、会場のフィシュマークトギャラリーです。外観は古いのですが、中は新しい設備が整っています。展示のために、筆ペンでタイトルをかかされ、大きくひきのばされたのには、悪筆の私としては大いによわりました。

1985年３月訪問

九州陶磁文化館学芸員

鈴　田　由紀夫氏

1985年３月訪問

まるで〝国賓〟並みの待遇で、マイセン市の美しい自然に設けられた『有田の森』一佐賀県・有田訪欧団に同行した私は、ＤＤＲがいかに有田を大切な存在として考えているか、身をもって知らされました。又、ＤＤＲ国民の〝アリタ〟への関心も高く、マイセン市の『有田展』で芸術家や市民達が伝統技法からファインセラミックスまで幅広く展開する有田の姿に感嘆、団員に熱心に質問する姿が今も目に焼きついています。

1985年６月訪問

西日本新聞社　前伊万里支局長

河　内　信　行氏

1985年６月訪問

どうしても東欧へ行きたいと念願していた。有田の磁器は300年も前から世界をかけめぐっているというが、その証拠を見たい。有田町訪欧団の一員に入れていただいて、1985年（昭和60年）にそれが実現した。ヨーロッパ各地の格式高い宮殿に飾られてある、有田の祖先たちの作品の数々を見てどれほど感動したかしれない。売られていった有田磁器はすばらしい環境のなかに安息していた。ドレスデンは立派に復興し昔のままのバロックの息吹が満ちている。

各々を取り上げるには紙片がたりないが、エルベの畔りのかっての栄光の街、ドレスデンの再現をみて、文化を守ろうとする民衆の悲願、平和への祈りが、私の小さな動脈の中へも入り込むように感じた。有田の磁器が再び世界のニーズを反映して進展し、実用もふまえながら人々の心をとられるよう、平和の旗手ともなるよう祈ってやまない。

1985年６月訪問

唐津市在住　　山　中　和　子氏

（旧姓深川）

1985年６月訪問

1985年６月訪問

有田・マイセン姉妹都市提携訪欧団の一員として、文化交流のため、日本舞踊を披露することになり、私達はその任務をおびて参加しました。

エルベ川の小高い丘にそびえる素晴らしい古城アルブレヒト城にて、『有田展』が開催され、ご来客の皆様にドイツは伝統ある音楽を披露し、その後私達が、日本舞踊『さくらさくら』『有田皿山踊り』と２曲を披露しました。その時の感動は今もなお、昨日の事のように思い出されます。

ここに至るまでには、まず選曲、そして振り付け、次は衣装選び（深川家の婚礼衣装）、又それに似合った髪型、化粧、振り袖の着付け等、素人の私達は毎日特訓を重ねて本番を迎えました。古城の狭い準備室に、ドイツ男性楽士の同室願いがあり、ドイツ語と日本語とジェスチャーでやっと話し合い、30分しかない貴重な時間を10分費やし、残りの20分必死の思いで気付けをすまし、扉を開け、黒、赤、白の振り袖姿で踊り出た時の拍手。もう夢中で踊りました。

大会堂の破れるような拍手がいつまでも聞こえます。

私達の役目は終った。そう思い感慨無量でした。

1985年６月訪問

有田町在住

溝　上　文　枝・深　川　泰　子

篠　原　恵美子の三氏

ホテルベレビューの「有田の間」

陶磁器の町として知られる、マイセンを訪問して、すごくよかったと思います。ゆっくり流れるおおきな川（エルベ川）、お城、教会、町並み、全てに子供の頃憧れた、おとぎ話の世界をみたような気がしました。

アルブレヒト城は、後期ゴシック様式で大聖堂とともに建つお城です。中には、螺旋状の階段や、コンサートホールがあります。なぜか、その薄暗い階段が印象的でした。それに窓から見るマイセン市街の風景は、絵を見るような感じで、おもわず立ち止まったくらいです。

歴史の重みを感じさせられる町並みや石畳、そんな中に自分がいるということが夢のようで、できればさめないでいてほしいと思うことばかりの夢旅行でした。

1988年５月訪問

1988年５月訪問

西有田町在住　有田ACN勤務

村　田　律　子氏

マイセンを訪れた人々

◈ 1970/8月　窯業調査団

山口秀市　ヤマト陶磁器㈱社長
金子源　㈲源右衛門窯社長
蒲地昭三　㈱賞美堂社長
深川正　㈱香蘭社社長
酒井田正　㈱柿右衛門窯
武富忠勝　親和陶磁器㈱社長
森正洋　デザイナー

◈ 1979/9月13～26日　欧州三大窯業視察

鍋島直紹　国会議員参議院議員
鍋島和茂　国会議員秘書
青木類次　有田町長
池田喜与太　有田町議会総務常任委員長
今泉今右衛門　㈾今右衛門
今泉泰子　㈾今右衛門窯社員
中島政司　文山製陶㈲社長
深川正　㈱香蘭社社長
中原隆　有田町役場企画担当課長
金子尚弘　㈲源右衛門窯
酒井田正宏　柿右衛門販売専務
下平尾勲　福島大学教授
野田政男　㈲丸兄商社社長
宮副新一　佐賀相互銀行㈱社長
山本柳吉　㈱華山専務
岩永正徳　岩徳製陶所事業主
岩永寿久　親和陶磁器㈱工場長
上滝長久　伊万里信金営業部長
梶原茂弘　陶芸しん窯専務
川浪知行　㈲観山製陶所常務
川口正信　川口屋㈱社長
岸川吉次　岸川絵具店㈲社長
岸川忠弘　岸川絵具店㈲
桑原正敏　桑原陶器店事業主
杉原常次　杉原一壺事業主
土本博　㈲外山堂社長
西村健三　西部窯業㈱陶芸部次長
馬場作　有田陶業㈳理事長
原田重嗣　㈱原重製陶所常務
藤本覚司　㈲藤巻製陶所社長
堀江茂男　エトワールホリエ社長
溝上哲也　㈲幸右衛門
水崎貞雄　㈱旭印刷営業課長
諸隈蒙彦　貞山製陶所
吉富幹人　㈲吉富走人工房
久間覚　西日本新聞開発局長
高杢一彦　西日本新聞社
山本康雄　西日本新聞社
北島忠則　サガテレビ㈱編集部次長

◈ 1982/5月22～31　ドレスデン・マイセン窯業視察

香月熊雄　佐賀県知事
青木類次　有田町長
梶原謙一郎　有田町議会副議長
池田喜与太　有田町議会総務委員長
古賀喜佐雄　有田町議会産業建設委員長
中島八郎　有田町議会産業建設副委員長
山口秀市　ヤマト陶磁器㈱社長
山本義幸　山忠商店社長
篠原文雄　篠原商店社長
山本哲郎　㈱華山社長
緒方欣一郎　佐賀ダンボール㈱社長
岩尾熙　岩尾磁器工業㈱副社長
岩尾和子　岩尾磁器工業㈱副社長夫人
山口忠太　ヤマトク社長
山口久子　ヤマトク社長夫人
佐藤登士夫　走波窯社長
佐藤シカ　走波窯社長夫人
橋本睦夫　佐賀銀行有田支店長
三井所清典　芝浦工大教授
井手誠二郎　県立有田工業高校教諭
井本勇　佐賀県総務部長
相場信博　佐賀県秘書課長補佐
今田美奈子　洋菓子家
藤本和男　貝山製陶所社長
下今朝隆　下建設㈱専務
本石優　有田焼直売㈳理事
中原隆　有田町役場商工企画課長
住江次郎　㈱三越旅行事業本部課長
山田収一　三越外商本部九州担当部長
北島弥生

◈ 1983/3月20日　マイセン磁器とトレスデンの古伊万里名品展出品交渉

森永鉄雄　有田町助役
中原隆　有田町役場企画課長
松隈和富　県立九州陶磁文化館館長
前山博　県立九州陶磁文化館学芸課長

◈ 1983/10月27日～11月6日　「マイセン磁器とドレスデンの古伊万里名品展」の終了報告と出品物返納

山下久幸　町教育委員会教育長
樋渡公人　県立九州陶磁文化館副館長
吉永陽三　県立九州陶磁文化館学芸員

◈ 1984/5月日本有田の陶芸並びに名窯展事前協議

深川正　㈱香蘭社社長
中原隆　有田町企画産業課長

◈ 1985/3月2～17日「有田展」出品物確認と展示指導

鈴田由紀夫　県立九州陶磁文化館学芸員

◈ 1985/3月12～21日　「有田展」エアフルト会場開会式出席

古藤浩　佐賀県出納長
高島忠平　県教育委員会文化課参事
中島政司　佐賀県陶磁器工業㈳理事長

◈ 1985/6月4～16日　有田・マイセン姉妹都市佐賀県・有田町訪欧団

井本勇　佐賀県副知事
青木類次　有田町長
藤山巌　県立九州陶磁文化館館長
山田陸三　佐賀県秘書課長補佐
前田丈夫　有田町役場財政課長
岩尾新一　有田商工会議所会頭
深川正　㈱香蘭社社長
今泉今右衛門　13代今右衛門
辻常喜　辻精磁社社長
石井友規　㈱柿右衛門窯部長
金子昌司　㈱源右衛門窯
金子スエノ　㈱源右衛門窯
久間覚　西日本新聞社取締役
河内信幸　西日本新聞伊万里支局長
越智正憲　サガテレビ製作部主任
佐藤登士夫　走波
中島誠一郎　有田町議会議員
中島良人
岩尾俊志　岩尾磁器工業㈱
岩本幸一　松尾建設㈱常務
清水耕一郎　アルセッド建築研究所
佐藤シカ　主婦
内藤大典　㈱サガテレビ専務
井垣春雄　美術コンサルタント
山中和子　主婦
深川泰子　主婦
本村瑤子　主婦
梶岡陽子　主婦
池田保明　医師
池田栄子　主婦
藤井陽滋　しん窯デザイナー
梶原太郎　しん窯社長
田中英寿　㈱香蘭社
溝上久枝　主婦
篠原恵美子　主婦
山口フジノ　主婦
久間千鶴子　主婦
高口鉄生　西日本新聞旅行社

◈ 1985/8月2～10日「有田展」ベルリン会場展示指導

坂本義弘　佐賀県窯業試験場指導部長

◈ 1985/8月4～16日　「有田展」ベルリン会場開会式

志岐常文　佐賀県教育委員会教育長
北村一義　佐賀県教育委員会文化課長
鷹巣典雄　有田町議会議員
中西敏明　有田町議会事務局長
青木尊重　大学教授
岸川貞光　会社社長
中原聡子　中学生
中原康　大学生
吉野啓子　会社役員

◈ 1987/5月30～6月13日　ベルリン生誕750年祭招待

青木類次　有田町長
前田丈夫　有田町役場企画産業課長
西山峰次　ＡＣＮ社長

◈ 1988/5月23日～6月2日　姉妹都市10周年記念事業

青木類次　有田町長
福島善三郎　県商工労働部長
川口武彦　町議会議長
田代忠恭　有田町建設課長
前田丈夫　有田町企画産業課長
岩永浩美　大有田焼振興㈳理事長
酒井田柿右衛門　14代柿右衛門
丸尾哲夫　青木建設有田ＶＯＣ代表
加藤弘次　㈱東急エージェンシー
井手信雄　㈱東急エージェンシー
松尾嘉之　㈲有田焼会館磁州窯常務取締役
蒲地照明　㈱カマチ陶舗代表取締役
岡澤功　㈱香蘭社専務取締役
岩永正徳　㈱陶芸岩徳代表取締役
前田淳一　有田町議会議員
西山典秀　陶舗　匠
中島誠一郎　有田町議会議員
中島良人
西山峰次　有田ＡＣＮ社長
金子節男　陶商
篠原貞彦　篠英陶磁器社長
中島京子　岩永浩美後援会事務所
井手美代子　主婦
岡澤弘子　主婦
館林一　館林建設社長
高杢一彦　西日本新聞旅行
川口勝男　柿右衛門窯東京事務所
嶋田義弘　有田ＶＯＣ計画室長
白石信吾　有田ＶＯＣ
西山清治　有田町議会議員
村田律子　有田ＡＣＮ社員

年　表

有　田

1145	
1592	豊臣秀吉の命により鍋島直茂は軍勢をひきい朝鮮に渡る。慶長２年（1597年）再び朝鮮に出陣。
1598	豊臣秀吉の死により在鮮の日本軍は召還される。陶工李参平は鍋島勢と共に日本に渡来。
1600	オランダ連合東印度会社（VOC）が設立。
1607	龍造寺高房が没して名実共に鍋島氏の佐賀藩が成立。鍋島勝成初代藩主となる。
1609	平戸にオランダ連合東印度会社の商館を開設。
1616	李参平は多久より有田乱橋に移住し、泉山に磁石原料の陶石を発見。白川天狗谷で磁器生産をはじめる。
1637	佐賀鍋島藩は有田・伊万里郷の陶業地と陶工を整理し、窯場を13ヶ所に定める。
1641	オランダの平戸商館は長崎出島に移される。
1646	柿右衛門赤絵付けに成功し、長崎に出て赤絵物を売り始めた。
1653	長崎商館がはじめて有田磁器を輸出。このころ、鍋島藩窯（御道具山）は岩谷川内にあり、寛文年間（1661～1672）南川良へ移る。更に延宝年間（1673～1680）大川内山へ移る。
1655	李参平上白川で没。
1659	オランダ商館が有田皿山と大量に磁器輸出契約を結ぶ。以後数十年間にわたり約200万個の有田焼が輸出された。
1661	鍋島家御道具山は、南川原山へ移る。中国磁器にかわって有田磁器の輸出が本格化する。
1672	この頃、鍋島藩は赤絵屋11軒を集めて赤絵町を設ける。その後16軒となる。
1673	（1673～80）鍋島家藩御道具山は大川内山へ移る。
1695	この頃、オランダのデルフト窯では陶器に古伊万里風の絵付けを始める。
1698	オランダ東インド会社を通しての肥前磁器の輸出は最高となる。
1750	イギリスのチエルシー窯やウースター窯で柿右衛門風の磁器が製作される。
1757	オランダ東印度会社は有田磁器の輸出を打ち切る。
1828	有田皿山窯場の大火。
1867	有田焼をパリー万国博覧会へ出品。
1869	京都の陶工高橋道八を有田に招き色絵付けや楽焼の指導をうける。
1870	ドイツ人化学者ワグネルを有田に招き、染付け顔料として酸化コバルトの使用法、石炭窯の焼成などについて学術的指導を受ける。
1873	ウィーンの万国博覧会に有田焼を出品。
1876	陶業盟約を結び、泉山陶石の採掘と窯焼きの自主統制を行い有田陶業の復興をはかる。米国フィラデルフィア万国博覧会に出品。
1881	江越礼太、有田町に陶器工芸学校（勉脩学舎）を設立。わが国における最初の工業学校である。
1895	有田徒弟学校開校（現有田工業高等学校の前身）
1896	西松浦郡陶磁器品評会を開き陶磁器製造の向上をはかる。陶器市、九州山口陶磁展の始まりである。（以後毎年開催但し1942年から1947年まで中止）
1900	有田徒弟学校を廃止、佐賀県立工業学校有田分校を設立。
1903	佐賀県立有田工業学校創立。
1904	セントルイス万国博覧会が開催され、有田から多数の業者が出品する。
1915	陶磁器品評会の期間中に窯元や商店の蔵さらえ大売り出しが行われ有田陶器市として発展する。
1916	有田焼創業300年祭。
1917	陶祖李参平の碑建立。５月４日を「陶祖祭」の日と決める。
1948	第46回陶磁器品評会が開催され陶器市が復活する。
1966	有田焼創業350年祭。
1971	柿右衛門製陶技術保存会と色鍋島技術保存会が文化庁から重要無形文化財に総合指定される。
1979	有田町とドイツ民主共和国マイセン市が姉妹都市提携の調印をする。
1985	佐賀県立有田窯業大学校開校。

マ　イ　セ　ン

1575～83	
1670	アウグスト強王（在位1694～1733）生まれる。
1675	このころから科学者エーレンフリート・ヴァルター・フォン・チルハウゼンが磁器を焼成する研究を重ねていた。
1682	２月４日　ヨハン・フリードリッヒ・ベドガー、チューリゲンに生まれる。
1696	ヨハン・グレゴリウス・ヘロルド生まれる。
1705	ベドガー、マイセンのアルブレヒトブルグ城で実験始める。
1706	ヨハン・ヨアヒム・ケンドラー生まれる。
1707	ドレスデンにベドガーの実験所が置かれた。
1708	１月15日、実験日誌のベドガー自身の記載によると、初めて白色磁器が焼きあがる。
1709	３月28日、ベドガーと彼の共同研究者は磁器の発明を報告する。
1709	10月、チルンハウゼン没す。
1710	１月23日、ヨーロッパ磁器の発明が四ヶ国語で公式に発表される。ライプチヒの「10月市」に製品が初めて出品される。６月６日、アルブレヒトブルグ城にヨーロッパ硬質磁器最初の製作所が完成する。この頃、中国の白磁を写した白色炻器、宣興窯の炻器が作られる。
1715	ドレスデンのアウグスト強王が磁器の収集を始めた（～33年）
1717	マイセンにおいて最初の染付製品が生まれる。４月19日、アウグスト強王は自国の600人の騎兵とプロシア王の所有する中国磁器127点と交換する。
1719	アウグスト強王の磁器の館、すなわちドレスデンの「日本宮」を飾るための磁器製品が発注される。
1720	ヨハン・グレリウス・ヘロルド、ウィーンからマイセンにやってくる。このころから白磁の上に色絵彩色技法が開発される。
1720～33	柿右衛門様式を写した色絵磁器が製造された。
1721	アウグスト強王はドレスデンの居城の収蔵品に関する在庫目録をつけさせる（ヨハネウム番号）
1722	ライプチヒの見本市に彩色磁器が出品される。
1723	Ｊ．Ｇ．ヘロルド宮殿絵付師に任命される。
1731	彫刻家ヨハン・ヨハヒム・ケンドラー、マイセンにやってくる。以後、磁器の成型家として活動。
1733	アウグスト強王、没す35,798点の磁器を残すと伝えられる。
1735	ザクセンの総理大臣ハインリッヒ・フォン・ブリュール伯爵無制限の機能と用益権をもって製陶所を受け継ぐ。
1740	マイセン磁器製作所の従業員218人を数える。
1751	マイセン磁器製作所の従業員571人を数える。
1756	７年戦争始まる。
1764	フランス人の彫刻家ミシェル・ヴィクトール・アシエ、マイセンにやってきて、ケンドラーと共に制作する。
1765	マイセン磁器制作所の従業員731人を数える。そのうち270人が絵付師。
1775	１月30日、Ｊ．Ｇ．ヘロルド没す。５月18日Ｊ．Ｊ．ケンドラー没す。
1810	製陶所創設100周年記念祭。
1817	新しい染付（酸化クロム青）技法の発明（緑色の葡萄文様装飾）
1833	円型窯の導入、及びその他の技法改革を実施。
1839	焼成の燃料を木材から石炭に変えそれに伴う設備の改革
1853	初めて蒸気機関を設置する。
1864	制作所をアルブレヒトブルグ城からトリービッシュターの新しい建物に移す。
1916	製陶所の記録および作品の展示場が完成する。
1960	製陶所創設250周年記念祭。
1968	「芸術的発展のための集団」が発足する。
1982	ベドガー生誕300年記念シンポジウムが開かれる。